

目を覚ます。

自分を包んでいた毛布を部屋の隅に弾き飛ばすと、汚れた自分の部屋を見渡した。

まるで長い夢を見ていたかのようだ。

手には発砲したときの衝撃がまだジンジンと残っていた。

身体が空っぽになったような喪失感を感じる。私は一人になってしまった。

隅の暗闇から不安が首だけ出してこちらを見つめているように感じてしまい、

コートは着替えると外へと駆け出した。

外は既に太陽が沈み切っていたが、街灯が彼女の進む道を照らしている。

無性に怖かった。

私は頼りにしていたフードも、シロも失って、それでも生きていけるのだろうか？

その恐怖から逃れるように無我夢中で走っているさなか、衝撃。

がむしゃらに走っていたコートは、避けきれずに人へとぶつかってしまう。

軽い謝罪を済ませて立ち上がろうとするが、袖をつかまれてその場に留められた。



「待って！コート……？コートじゃない！」



「アンバー！？」



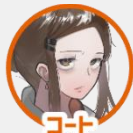
そこにいるのは服も、髪も、ボロボロになったアンバーだった。

彼女は私が本物だと認識すると突然溢れるほどの力でコートを抱きしめた。



「よがった！よがった！！！！！」

滝のような涙を流すアンバーにコートは困惑していた。



「なんでアンバーおねえちゃんがこんなに泣くんだよ！」

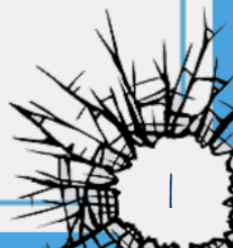


「だって！コートも家から出てこなくなっちゃうから！」



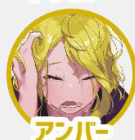
「それは……そう、だけど。  
アンバーおねえちゃんには関係ないだろ！」

突き放そうとするが、アンバーの腕は離れない。

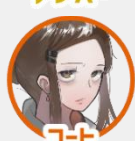




「<sup>かんけい</sup>関係あるっ！！！！」



「だって、あたしは、『おねえちゃん』だから……」



「ど、どういうこと……？」

言葉の真意が掴めずに困惑するコート。  
ずびーっ！鼻水の音を最後に、アンバーはようやく泣き止んだ。



「文字通りの意味よ。私はあんたのお姉さんなのよ」



「はあ？」

勿論。そんなはずはない。  
姉がいた記憶なんて脳のどこにも収まっていない。  
そんな困惑をよそに、アンバーは語りだす。



「あたしのお父さんとお母さんはね  
なんてことない普通の夫婦だったんだ」



「だけど私が中学校を卒業したとき、お父さんが不倫相手と結婚するって離婚をしちゃってさ、  
そこからは意地の張り合いで--、お母さんもすぐに再婚しちゃってさ」



「……どっちも同時期に子供を授かったんだ」



「私は両親がどちらも負けず嫌いなことを知っていたから、  
きっと、よくないことになると思って」



「だから、あんたと……、フードが、中学校を卒業したら、  
2人を家から出してあげようと思って必死に貯金をしていたんだけど……」



「騙されて、お金を持ってかれちゃって……」



ふたたび泣き出すアンバー。



アンバー

「もうダメだって、何度も思った、何度も諦めたくなった」



アンバー

「フードも、コートも助けられないおねえちゃんでごめんって何度も謝ったけど」



アンバー

「コートが、今、ここに、コートが生きていてよかった」

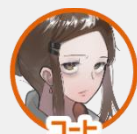
コートの肩は既にアンバーの流した液体でびしょびしょになっていたが、嫌な気持ちはまったくなかった。



アンバー

「こんなに痩せて……ご飯食べてるの？」

服の上から輪郭を確かめるように手を滑らせたアンバーは、心配そうに声をかける。



コート

「まあ……少しは……」



アンバー

「バカ！ちゃんと食べなさいよお……」

脱力して崩れるアンバーをどう支えていいかコートは分からなかった。アンバーはそのまま、コートに説教を続ける。



アンバー

「さっきも突然ぶつかってきてびっくりしたんだから……」



アンバー

「下なんか向いてないで、前を向いて歩きなさいよお……」



アンバー

「信号も危ないから、ちゃんと右も左も見て、赤になってから渡りなさい……」



アンバー

「心配ばっかりかけて、本当に、本当に……」





「ほんとに……生きててよかった……」

アンバーの<sup>こえ</sup>声が<sup>しず</sup>静かな<sup>よる</sup>夜に<sup>と</sup>溶けていく。

コートはアンバーを<sup>だ</sup>抱きしめた。

真<sup>ま</sup>っ黒<sup>くろ</sup>な<sup>よぞら</sup>夜空には<sup>たくさん</sup>沢山の<sup>ほし</sup>星がきらめいていた。

しかし、今は<sup>いま</sup>小さな<sup>ちい</sup>街灯<sup>がいう</sup>の下で、その<sup>した</sup>両腕<sup>りょううで</sup>に<sup>おさ</sup>収まる<sup>ひと</sup>一つの<sup>だいじ</sup>きらめきを大事にしたかった。

これからのことは<sup>いま</sup>今の<sup>わたし</sup>私には<sup>わ</sup>分らない。

やるべきことや、やらないといけないことが<sup>つぎつぎ</sup>次々と<sup>のうり</sup>脳裏にあらわれる。

ただ、<sup>わたし</sup>私は<sup>ふあん</sup>不安でも、<sup>こわ</sup>怖くても、<sup>つら</sup>辛くても、

それでも、それでも<sup>い</sup>生きていくと<sup>き</sup>決めたんだ。

<sup>みらい</sup>未来を<sup>ふひつよう</sup>不必要に<sup>おそ</sup>恐れて、<sup>たいせつ</sup>大切な<sup>いま</sup>今を<sup>うしな</sup>失わないように。

<sup>やさ</sup>優しく、<sup>かのう</sup>可能な<sup>かぎ</sup>限り<sup>やさ</sup>優しく、アンバーを<sup>だ</sup>そっと抱きしめた。

\*\*\*\*

やあ。<sup>とつぜん</sup>突然びっくりしたかな？

<sup>きみ</sup>君と<sup>ふたり</sup>二人で<sup>す</sup>過ごせた<sup>じかん</sup>時間はボクにとって、とても<sup>しあわ</sup>幸せなものだったよ。

そして――。<sup>ぼく</sup>僕からも<sup>い</sup>言わせてほしい。

<sup>い</sup>生きることを<sup>えら</sup>選んでくれて、ありがとう。

<sup>じかん</sup>時間はたくさんあったからね。

<sup>きみ</sup>君が、ボクが<sup>い</sup>居なくても<sup>ふあん</sup>不安にならないような<sup>ほうほう</sup>方法を<sup>ひとり</sup>一人でずっと<sup>かんが</sup>考えていたんだ。

まあ、たいしたものを<sup>ようい</sup>用意できたワケじゃあないんだけど（<sup>わら</sup>笑い<sup>こえ</sup>声）

<sup>すこ</sup>少しだけ<sup>れんしゅう</sup>練習をしたからさ、よければ<sup>き</sup>聞いていってほしいな。

